

## 甲状腺関連ホルモン（TSH、FT4、FT3）における当院の非特異反応発生頻度について

◎立花 悟<sup>1)</sup>、瀧田 尚子<sup>1)</sup>、菅野圭佑<sup>1)</sup>、西原 温子<sup>1)</sup>、吉田 博<sup>1)</sup>、西原 永潤<sup>2)</sup>、宮内 昭<sup>3)</sup>  
医療法人 神甲会 限病院 臨床検査科<sup>1)</sup>、医療法人 神甲会 限病院 内科<sup>2)</sup>、医療法人 神甲会 限病院 外科<sup>3)</sup>

### 【はじめに】

免疫学的測定法においては異好性抗体などによる干渉を受けるため、臨床所見と検査値が乖離を認めることがある。当院では非特異反応が疑われる場合、別法での再測定やPEG添加回収試験、TSH希釈直線性試験等の非特異反応確認試験を実施している。今回、当院での非特異反応発生頻度について集計を行ったので報告する。

### 【対象と方法】

2020年6月から2021年6月までの1年間で甲状腺関連ホルモンを測定した患者のうち非特異反応確認試験を実施した件数を集計した。同一患者において期間内で重複する場合は1件として計算した。また、上記期間における項目毎の非特異反応発生率を算出し、項目毎による差を確認した。さらに、非特異反応を引き起こす原因の傾向についても調査した。

### 【結果】

1年間で甲状腺関連ホルモンを測定した全患者数は約7万人であった。そのうち、非特異反応確認試験を実施した件数は64件であり、21件で非特異反応が確認された。項目毎の非特

異反応発生率はTSHが0.006%（1万5千人に1人）、同様にFT4では0.005%（2万人に1人）、FT3では0.05%（2千人に1人）であった。以上の事から、現状FT3が他項目に比べて著明に非特異反応発生頻度が高いことが判明した。このFT3の非特異反応の原因の大半が(1)試薬中のストレプトアビジンに対する非特異物質の影響と(2)試薬中の抗T3モノクローナル抗体に対する非特異物質の影響の2つであった。

### 【考察】

今回、当院の甲状腺関連ホルモン（TSH、FT4、FT3）における1年間の非特異反応発生頻度を集計した。FT3に非特異反応を引き起こす原因の大半が他項目では試薬の改良によって影響が低減されたものであり、今後FT3でも試薬の改良により問題が解決される可能性があるかと推察される。現場で働く検査技師としてはこの現状を念頭に置きながらデータをチェックし、必要があれば精査を実施することが正しい診断につながると思われる。

神甲会限病院 連絡先：078-371-0357